

# 戦争花嫁ステレオタイプの変遷 -戦争とジェンダー抑圧-

河原崎やす子

## Transition of War Bride Stereotypes -Considering War and Gender Oppression

KAWARASAKI, Yasuko

### 戦争とジェンダーとステレオタイプ問題の所在

戦争はジェンダー問題と深く関わりを持つ。その関わりがどのような形をとるかは国家や時代、文化や社会と複雑に絡まる。シンシア・エンローはフェミニズム観点から国家の軍事化を分析し、その関わりの根幹となる理論を展開している<sup>1</sup>。彼女は国家の軍事化には軍事化の推進者による女性の生活の軍事化が不可欠だとする。それは、まず女性を周縁化することで社会的政治のプロセスが男性化し、その結果軍事的価値が高まって戦争を推進できるからである。戦争推進に強力に作用するのは「保護するもの」と「保護されるもの」という関係性であり、その関係性はジェンダー化されて社会や制度に構造として組み込まれる。この構造から戦争を開始し継続する力が生じ、それぞれが力を発揮すべく持ち場で死力を尽くすことになる。しかし最終的に戦争に敗北した場合、この軍事化の社会構造もまた崩壊するわけである。敗戦は保護する側にも保護される側にも大きな災難をもたらすが、多くの場合後者が受ける傷はより深く大きい。太平洋戦争で日本が敗戦したときも、このような崩壊による大混乱が起きた。いわゆる「女・子ども」とひとくりにされる「保護される」者は、予想もしない混乱の中に投げ込まれたのである。エンローの思考を基盤として戦争とジェンダーの関係をこのように位置付けた上で、戦争花嫁という存在をジェンダー視点から考えてみる。

日本人戦争花嫁の存在は戦争とジェンダー抑圧という観点から考えられるだろうか。明らかにこれは戦時に横行する直接的な暴力や犯罪などを介したジェンダー抑圧というわけではない。しかし保護される側と位置づけられていた女性が、保護する側の父親すなわち父権制に逆らって仇敵だったアメリカ人男性と結婚するという構図は、戦前の社会構造ひいてはジェンダー秩序の崩壊を示す。その結果生じた戦争花嫁に対するネガティブなステレオタイプは、それに反発する社会が課したジェンダー抑圧として考えられる。日本の太平洋戦争史では戦争花嫁はいわば埋もれた歴史となっており、光が当てられたのは近年になってのことである<sup>2</sup>。本論は日本人戦争花嫁に焦点を当て、そのステレオタイプ変遷を分析して、このようなジェンダー視点からの再評価を試みるものである。

ステレオタイプとはありもしない虚像をねつ造することで対象を貶める機能をもつが、戦争花嫁のステレオタイプの変遷の分析は、この歴史事実に対するジェンダー視点からの新たな解釈を可能にする。アジア系アメリカ人の社会心理学の研究は、ステレオタイプがその社会を形成する社会的、経済的、政治的状況を反映したものと定義づけている<sup>3</sup>。中国系と日系アメリカ人のステレオタイプ変遷を比較対照したこの研究は、ステレオタイプとは対象者の実像とかけ離れて社会の風潮に応じて形成されること、社会状況に連動し激変もありうること、たとえ肯定的なステレオタイプでも否定的な側面があり人権を無視したものであることを結論付けている。またステレオタイプはアイデンティティ

とも結びつくという最近の研究では<sup>4</sup>、ステレオタイプは脅威という感覚と結びつき、その対象となる者につきまとして振り払うのは非常に難しいとも指摘されている。ステレオタイプが社会に影響するばかりか個人にも影響を与える脅威だからである。このようなことを踏まえて、本論文ではまず、戦争花嫁のステレオタイプがいつ、なぜ、どのように形成され、どういう働きをしたかを追跡し分析する。

本論文の着想は以下の経緯による。日本人の戦争花嫁とはすでに70年ほどの年月を経た歴史事象であり、当事者はすでに高齢で数が減少している。その中でNHKが戦争花嫁を取り上げて、2020年1月29日に「戦争花嫁たちのアメリカ」<sup>5</sup>というテレビ番組を放映した。この番組には「知られざる戦争花嫁の物語」という副題がつけられ、埋もれた歴史の一コマという位置づけがされている。NHKは一連の戦争関連の特別番組で戦時の加害や抵抗の歴史を取り上げており、あまり知られていない事実の掘り起こしをしてきた。NHKが戦争花嫁をテーマにしたドキュメンタリーを制作したのはこれが初めてではなく、戦後50年の節目の1994年にも特集している<sup>6</sup>。2020年の番組は、2016年にキャサリン・トルバート（Kathryn Tolbert）がワシントンポストに掲載した記事「日本人戦争花嫁たちの語られなかった物語」（“Untold Stories of the Japanese War Brides”）が米国で大きな反響を呼んだことを紹介し、その記事内容を踏まえた構成を取っている。この記事とドキュメンタリー番組はともに、いま戦争花嫁を取り上げることに大きな意味があるとする。それはアメリカにおける人種差別問題の再浮上という現状へ一石を投じることに加えて、これを戦争と女性というジェンダー問題として取り上げたいという考えからである。筆者は戦争とジェンダーをテーマとして研究を続けてきたが、その発端が日本人戦争花嫁のネガティブなステレオタイプに関する研究であった<sup>7</sup>。この研究はこれまで継続してこなかったが、こういった状況の中で再びこのテーマを取り上げ、新たにジェンダー視点から戦争花嫁を再考する意味を見出したのである。

## 戦後日本の状況と戦争花嫁の出現—歴史概観

本論で戦争花嫁とは、第二次世界大戦後以降に日本に駐留した米軍関係の男性と結婚した日本人女性をさす。日本の第二次世界大戦敗戦後のアメリカ軍による日本占領は、様々な変革をもたらした。なかでも民主主義の概念とそれに基づく法制度の導入は日本人にとって極めて大きな変化であった。男女平等は基本概念となり、新たな民法は戦前の家制度を廃止して男女関係の平等性を示した。家制度は長年にわたって日本女性を抑圧し苦しめた制度であったが、敗戦による民法改正は日本女性の位置づけを劇的に変えたのである。ところが日本社会の女性観はそれに従うこともなく、従来の女性蔑視の観念が横行していた。たとえば日本政府は、一般女性の性を守るためと称して敗戦直後に米国軍人相手の娯館 RAA（Recreation and Amusement Association）を設立した。これは公的に性を提供する場であり、一方の女性を守るためにもう一方の女性に売春をさせるという女性を分断する旧来の女性観を示したものである。言い換えると、一般の女性は社会が守るべき存在であり、女性はその社会に従うべきだという観念である。

こうして日本の女性たちは法的には父権制から解放され自由になったとはいえ、旧来の社会観念に取り囲まれていた。それにもかかわらず、アメリカ兵と遭遇し結婚にまで至ったのは、どのような経緯だったのだろうか。彼らの結びつきには経済的、心理的、社会的要因が考えられる。筆頭に挙げられるのは経済的要因で、女性でも戦後の貧しい家計を助けるために働く必要があったことである。ただし女性が働ける場は限られており、中ではアメリカ軍の売店 PX（Post Exchange）や米軍軍属相手のホテル、米軍人家庭のメイドなどの米軍関連の場が

高給で安定した職場として人気があった。これらは英語を必要としたが、英語を話せない女性たちはバーやクラブ、ダンスホールで軍人相手に仕事をした。こうした仕事場がアメリカ人男性との出会いの場となったわけである。経済的困難を抱えた日本人女性が軍からのドル建て給与で豊かに暮らすアメリカ人男性に心惹かれたのは当然の成り行きであった。つまり経済的要因のために働いた結果、米軍兵士に惹かれるという心理的要因が加わったわけである。さらに心理的要因として挙げられるのが、アメリカが日本にもたらした自由と平等の観念である。これはアメリカ人やアメリカ社会へのあこがれを日本人に生じさせ、恋愛や結婚への推進力になった。これに加えて重要な社会的要因として、戦死や負傷による適齢期の日本人男性の圧倒的な不足が挙げられる。未婚女性たちは結婚パートナー不足のため年齢差のある男性を選ぶか、シングル的一生を送るかという厳しい選択を迫られていた。そこに適齢期のアメリカ人男性が出現したのである。そもそも日本の伝統的な見合い結婚が愛ではなく社会的安定を大きな目的としていたことを考えると、アメリカ人男性との結婚もまた社会的安定として当事者には容認可能だったとみられる。こうした要因により、日本人女性はさほど抵抗感なくかつての敵国男性と交際し結婚に至ったのである。

だがいうまでもなく、アジア人とアメリカ人という国際結婚には大きな障壁が存在した。それは法的な障壁と情緒的な障壁である。法律の観点からみると、アメリカは1924年に移民法ですべてのアジア人の移民を禁止しており、アメリカ人と結婚した日本人は法的に米国には入国できなかった。1945年の戦争花嫁法でヨーロッパからの戦争花嫁の入国は認められた一方で、アジア人の戦争花嫁は除外された。だがJAACL（日系市民協会）の尽力で1946年に米兵の日本人婚約者が米国に入国できる法律が成立し、その後1952年の移民法改正でようやく1924年の差別法が全面撤回されて、晴れて戦争花嫁たちは米国の地を踏むことができるようになった。もう一方の情緒的な障壁とは、日米両国における戦争花嫁につきまとった差別と偏見である。日本における強固な単一民族意識は長年にわたって外国人への排他的な観念を醸造しており、その上敵側だった人間を家族に加えるなど論外だと考える日本人が大多数だった。継続する父権制観念では女性の結婚を父親か男性親族が最終的に決定するのが通例で、親たちの多くがこうした排他的強硬論の持ち主だった。米国の側もヨーロッパ系白人の戦争花嫁は許容できたのに対して、有色人種で異文化の日本人戦争花嫁は激しい非難の対象とした。日本人女性と米兵の結婚に対しては、マッカーサー司令官を始めとする日本駐留総司令部も懸念を表明している。それは文化の違いに加えて人種の違いおよび予想される混血児差別が結婚の破綻につながるなどの理由からであった。

こうした障壁によって決別したカップルも少なくなかったが、最終的には少なく見積もって3万人、多く見れば6万人くらいの日本人女性が戦争花嫁として渡米したとみられる<sup>8</sup>。結婚が最も多数であったのは第二次大戦後から朝鮮戦争の1950年代半ばにかけてであり、戦争花嫁の出身地は日本全土に渡っていた。

### ステレオタイプの形成—日本の戦後マスコミに見る戦争花嫁報道

こうして生じた戦争花嫁現象に対して、厳しい批判を含めた多くの報道がされた。この報道の及ぼした力に注目した筆者は、日本における戦後のマスコミにおける戦争花嫁関連の報道を調査分析した。以下に示すのは、1992年2月から1993年10月にかけて筆者が国立国会図書館で調査したデータとその分析である<sup>9</sup>。調査対象としたのは1945年から1981年に

版された新聞 6、週刊誌 13、月刊誌 24 の総計 43 の媒体に掲載された全 133 編の記事である。戦争花嫁の報道は 1946 年から始まり、50 年代半ばまでが最も多い。この調査の目的は、マスコミによる戦争花嫁のネガティブなステレオタイプの形成をたどることであった。戦争花嫁という事象が当初の客観的な報道姿勢から次第に偏見を含むようになった経緯に現れると考えたからである<sup>10</sup>。

日本人戦争花嫁に対する偏見には、三つの要素があるとテレサ・ウィリアムズ (Teresa Kay Williams) らは分析している<sup>11</sup>。一つ目は、戦後まもなく生じた外国人との結婚という事態に対する日本人の反感と批判である。日本では純血主義を尊重し異国の血統や混血を軽蔑し卑しむ伝統があったために、国際結婚そのものに対する厳しい非難や偏見が生じた。二つ目は、戦争花嫁となった女性への非難である。彼女らへの非難は戦争花嫁のネガティブなステレオタイプを生み、日本人の多くはそれを無批判に受け入れたのである。戦争花嫁を下層階級出身で売春婦やバーの女給だったとするのは、このような意図的な偏見から生じたステレオタイプである。三つ目には、アメリカ人男性の抱いていた日本人女性に対するステレオタイプが挙げられている。日本人女性は従順で控えめで自己犠牲的だというこの観念は、オリエンタリズムに基づいたものだ。ブッチーニのオペラ『蝶々夫人』やラフカディオ・ハーンの文学などによって西欧に広まって定着し、西欧人の日本女性に対するステレオタイプを形成し、駐留アメリカ兵の日本女性への憧憬につながった。しかしまた、この観念は日本人女性を米兵の思いのままになる道徳的に墮落した存在だというステレオタイプの形成にもつながったとみられる。

文献調査で着目したのは、こういったネガティブなステレオタイプがどのように表現されたのかという点である。中でもきわめて目立ったのは、象徴的に繰り返し使用されている特徴ある用語である。戦争花嫁を取り上げた 133 の記事のタイトルには、いくつかの言葉が頻繁に出てくる。最も目立つのは「パンパン」「オンリー」「バタフライ」「合いの子」の 4 語であり、いずれも当時でも特殊な用語で今日では死語となっているものもある。まず「パンパン」であるが、27 の記事タイトルに使用されており、年代的には 47 年から 53 年にかけて頻出している。この語は当時から「第二次大戦後、進駐軍の兵士を相手にした街娼」<sup>12</sup> という意味で使われており、その数は一時期 3 万人にも及んだという。パンパンの夢は「兵士についてアメリカに行くこと」とする報道も多く、この結果パンパンと戦争花嫁は混同され、両者ともに救いようのない国家の恥さらしだと記事では断罪されている。しかし実際に街娼が戦争花嫁となったケースはごくまれにしかなかった。中にはパンパンと戦争花嫁を混同してはいけないといった指摘をする記事もあるが、大部分の記事では戦争花嫁のステレオタイプが虚実ないまぜとなって捏造されている。「オンリー」も売春婦をさすが、特定の GI<sup>13</sup> を相手とする女性をさすので愛人と同義である。複数名の GI を相手とするオンリーをめぐって騒動が起きたという報道もあり、このような事件を通じてオンリーとパンパンは同一視されることになる。「バタフライ」はいうまでもなくブッチーニの『蝶々夫人』由来であるが、ここでは街娼の場を蝶のごとく転々とするパンパンの別名であり、パンパンと同様に戦争花嫁と混同されている。以上 3 語とは異なり、「合いの子」は日米の混血児を指す語で、この国際的な結びつきの結果生じた混血児という事態は批判的に報道されている。合いの子に関する報道記事数は 19 と比較的多く、51 年から 53 年に集中しており、この年代に社会問題として浮上したことがわかる。この混血児の数も戦争花嫁同様に不明であり、ある報道では 20 万人、また別

の記事では1万人と大きく差があるのは時代の混乱によるものだ。多くの記事が合いの子はパンパンやバタフライの子だと示唆しているが、これはこの時期の混血児につきまとい彼らを苦しめ続けた偏見であり、母親の戦争花嫁たちをも苦しめる要因ともなった。多くの戦争花嫁が渡米後に離婚の危機や夫による遺棄などの家庭的な困難に見舞われても日本への帰国をしなかったのは、帰国したら予想される混血児のわが子への偏見を考慮したためだと証言している。

以上の偏見に満ちたキーワードに加えて、記事の中には戦争花嫁の悲劇の報道も多くある。これはセンセーショナルな語調を伴った主観的報道で、主に週刊誌に掲載された。種々のエピソードには、有名女優の日系二世との華麗な結婚の破綻や東京裁判の判事との間に私生児を設けた日本女性の認知訴訟の敗訴、戦争花嫁はほとんどが売春婦出身で渡米してから離婚や遺棄されるという教会牧師の談話、夢が破れて離婚して帰国した戦争花嫁自身の女性たちへの警告など、夥しい数の戦争花嫁の悲劇的な末路が示された。これに加えて、アメリカ兵は日本人女性とは結婚するな、結婚は悲劇に終わるから、という主要紙に掲載された米国人牧師の警告は、日本人間に賛否両論を巻き起こした。また戦争花嫁自身による結婚の困難さを述べる体験談も多く寄せられ、石垣綾子や市川房江などのフェミニスト評論家もこの結婚に対する批判的意見を表明している。

このようにみえてくると、戦後マスコミが戦争花嫁に対するネガティブなステレオタイプ形成に大きく寄与したことは明らかである。これらの報道記事が先導してステレオタイプを形成したとまでは言い切れないが、少なくとも記事は当時の社会の意識を反映しており、その固定化には力を与えたと思われる。最も注目すべきは、戦争花嫁たちに対する誤った事実認定の報道である。彼女たちは下層階級出身で教育歴が低く、仕事に就けずにパンパンをしていた、などの報道は事実とは異なる代表的なものだ。後にインタビューなどから明らかになったのは、戦争花嫁の大多数が教育歴は高卒レベルで英語の素養があり、それゆえにGHQ関連のPXや通訳などの仕事を得ることができて、米兵と知り合ったケースが多かったことである<sup>14</sup>。また結婚の破綻に関しても報道のように悲劇だったかというところでもなく、離婚しその後には再婚した者も多く、最終的には多くが安楽を手にしたことを見逃すわけにはいかない。

なぜこのような現実と齟齬のある否定的なステレオタイプが形成されたのだろうか。この記事群の年代を辿るとその理由は明らかになってくる。1946年から47年を戦争花嫁報道の第1期とすると、この期の記事は女性の性的墮落傾向などを問題視するが、まだ戦後すぐの混乱期であるため女性たちは結婚してはおらず戦争花嫁という言葉は出てこない。いわばその前哨戦とも位置付けられる時期で、女性の行動への強い非難が示されている。しかし次の第2期の1948年から51年にはまずパンパンが登場し、次いでオンリーやバタフライという語も頻出し、彼女らへの反感を高める記事が続く。その背景にはGHQ主導の様々な法改正、ことに1947年の民法の改正があると考えられる。この時さまざまな女性の権利が法的に認められると同時に旧民法の根幹となる家制度が否定されたが、それに対する社会的な拒否感ばかり強かった<sup>15</sup>。ここから類推できるのは、戦争花嫁を当時の「女」という枠をはみ出した女性とみなし、いわばスケープゴートとして厳しく非難することにより、敗戦の喪失感や社会の枠組みの急変への怒りや憤懣のうっぶん晴らしをしたことである。そして第3期の1953年から61年ころまでにはパンパンと戦争花嫁を意図的に混同する記事が多数を占め、戦争花嫁の問題や悲劇に関する報道も続出する。この期に日本人は引き続き復興にいそしみつつも、

憲法や民法改正でかつての権威を失った男性主体社会を実際に体験して、その憤懣が高まったとみられる。その上日本人の生活がある程度落ち着きを見せたこの時期は、朝鮮戦争で駐留した米兵との間に多くの戦争花嫁が生まれ渡米した時期でもある。彼女らは日本女性が守ってきた道徳律を破壊した目障りな存在であり、しかも米国で豊かな生活を手にしているとして、憤懣やるかたない日本人の嫉妬と非難を浴びたのである。しかし第4期の1962年以降になると戦争花嫁の減少に伴って記事数も減り、いわば総括といった客観的な報道となる。それは日本が本格的に復興し、もはや敗戦の憤懣にも別れを告げ、戦争花嫁には関心も生じなくなっただけからでもある。こうしてみると、結局のところ戦争花嫁のステレオタイプとは、時間経過とともに変化して消滅した虚像であったことが見て取れる。現在では戦争花嫁という言葉すら知らない世代も増えており、その足跡がわずかに歴史に残されているのである。

### 『ティー』における戦争花嫁のステレオタイプとの闘い—インサイダーの声

日系アメリカ人のヴェリナ・ハス・ヒューストンは、上述したように戦争花嫁を母に持つ劇作家である。彼女は母のたどった半生を戦争花嫁文学ともいべき3部作の戯曲に表わした。ヒューストンは、上記のような日本で形成されたステレオタイプとともに、米国におけるステレオタイプが戦争花嫁を苦しめたと指摘する<sup>16</sup>。米国におけるステレオタイプとは日系コミュニティの戦争花嫁への対応につながった。日系人の多くは戦争中の強制収容という苦い体験を通じてアメリカへの忠誠心の重要性を認識しており、自分たちは異質の日本人である戦争花嫁に対して警戒心を抱いた。その結果、排除と差別の意識が生じてステレオタイプ形成に至るのだが、明らかにそれは日本におけるステレオタイプを反映したものであった。このような日系コミュニティの排除の意識は、たとえば1998年まで日系アメリカ人博物館に戦争花嫁関連の展示がなかったことなどに明らかだとヒューストンは述べている。

ヒューストンは自らのような戦争花嫁の子どもをアメリカの帝国主義や植民地主義によって生み出されたアメラジアンと規定し、“personal is political” というフェミニズム運動の標語を自分の作品の基本だとしている<sup>17</sup>。「政治的」とは外的なさまざまな圧力と個人のせめぎあいを指しており、そこではステレオタイプとの闘いが避けられない。ヒューストン自身も日本人の母とアメリカ黒人の父との混血という外貌のせいで、ステレオタイプとの闘いを強いられてきた。こうしてステレオタイプとの闘いは彼女の作品に一貫するテーマとなった。その最終的なゴールは“cultural, gender diversity” だとするが、それは文化的にバランスが取れて多様性と複雑性を内包した状態なのである。ヒューストンは母をモデルにした戯曲3部作 *Asa Ga Kimashita* (1980), *American Dreams* (1983), *Tea* (1988) でステレオタイプとの闘いとその終着点を描くことに成功し、劇作家としての評価を確立した。ことに *Tea* は1985年にサンフランシスコで上演されて以来絶えることなく上演されてきた戯曲で、日本でも翻訳劇として1994年に上演された。この作品には戦争花嫁の様々な形の闘いが描かれているが、いわばインサイダーの告発の叫びによって問題が明らかにされる。以下にこの作品を分析し、戦争花嫁自身のステレオタイプとの闘いを明らかにしてみる。

『ティー』は5人の戦争花嫁が米国においてそれぞれの状況を振り返るという構成をとる。その一人は著者ヒューストンの母節子で、あとはさまざまな戦争花嫁を合体させた架空の人物である。5人に共通するのは戦争花嫁となって日米両国で差別と偏見に苦しんだことであるが、その一方でさまざまな相違点も抱えており、その苦しみは多様に描き分けられている。

まず5人に共通するのが、日本における戦争花嫁のステレオタイプが与えた苦しみだ。節子は自分たちが伝統的な家父長制のもとにあったことを“…my life was my father’s hands and my mother’s in her father’s hands.”<sup>18</sup>（私の人生は父の手にあり、母の人生は母の父の手にあった）と認め、それに従わず“I can only follow my instincts…”（*Tea*, 249）（私は自分の直感のままに従うしかない）と自らの意思で生きることを決意する。しかし日本側の投げかける眼差しは厳しい。

“We are a casualty the Japanese do not care to count…The country hopes we will not be lucky … or brave…or accepted…or rich…（there is）the disdain…the contempt… a private envy…silent jealousy…longing.”（181）

日本が自分たちの幸せや豊かさを望まないことの根底には、軽蔑、恥辱、嫉妬などが渦巻き羨望すらあると彼女ら自身が見抜いている。これは先に見たマスコミの捏造したネガティブなステレオタイプの分析とぴったり符合する。これに対してヒューストンは一人の戦争花嫁に、“we weren’t all bad girls just because we fall in love with Americans…”（原文のまま、*Tea*, 166）私たちは悪くない、ただアメリカ人と恋愛しただけなのに、と反論させ強く抗議させる。ところがこの女性たちが闘わなければならなかったのは、このほかにもう一つ、アメリカ人の抱く日本女性のステレオタイプがあったのだ。これはオリエンタリズムに基づいた西欧の抱く日本女性イメージである。“exotic, the tragic butterfly, the prostitute, or the docile and deferential woman-child”（29）というセリフには、従順な人形イメージとセクシュアルな売春婦的イメージが混在している。日本にやってきた米兵の大部分がこのステレオタイプを抱いていたと思われるが、実際に結婚相手となった日本人女性はイメージとはかけ離れた自立し自己主張する女性たちだったのである。たとえば登場人物の一人のヒミコが夫から聞かされた結婚の動機は、“a good maid, for free”<sup>19</sup>（ただで手に入る気の利いた女中）を得るという屈辱的なものだった。ここに示されるのは、日本という支配下の国の女は意のままだといった米兵の抱く植民地主義的観念であり、西欧の抱く日本女性ステレオタイプにほかならない。彼女以外の4人の女たちの状況も、多かれ少なかれこのような植民地主義的な権力関係にあることが判明する。しかし彼女たちが日本ではなくアメリカを行先として選んだのはこのような認識を持つ以前であって、日本への帰国はもはやできない状況なのだ。

渡米後に戦争花嫁が闘ったのは、人種差別に加えて日本から移入されたステレオタイプである。まず人種差別として挙げられるのが上述の日本女性ステレオタイプであり、有色人で敗戦国の日本女性に対するアメリカの眼差しはより厳しいものだった。ヒミコの言葉で“It was more than racism. It was the gloating of victor over enemy…”（185）と明らかにされるのは、人種差別以上といえる他者への差別意識にほかならない。彼女たちはアメリカの白人ばかりでなく、日系コミュニティからも歓迎されなかった。ここには先に述べたヒューストンの指摘が組み入れられている。日本で形成された戦争花嫁のネガティブステレオタイプは日系人に苦い強制収容体験を思い起こさせ、警戒心と拒絶感を引き起こす。“They are not ‘our’ people. …because we remind them of what they don’t want to be any more.”（185）あの強制収容のような体験は二度とごめんだと思う日系人には、戦争花嫁も日本をルーツとする同胞だという共感や同情は全くなく、彼女らを警戒してコミュニティに参入させなかったのである。こうして孤立無援な戦争花嫁が同じ境遇の女性同士でせめてものつながりを持たたかという、それもなかなか困難だった。*Tea* では5人は米国内の同じ米軍基地に住んでいたために知り合

いとはなったものの、お互いに差別意識を抱いていたために打ち解けた付き合いにはならない。彼女らに差別意識をもたらすのは、日本における出身階級とアメリカにおける夫の人種の二つである。自分の出自の自慢や、白人の夫が黒人の夫より上だとする優越感などで、彼女たちは自らの内部の差別意識を表面化する。これもまた人間の根源的な他者化への欲望を表しており、ステレオタイプと無縁ではない。

この5人がお互いに連帯意識を持つようになるのが最後に用意されたシナリオである。厳しく困難な闘いの結果、仲間の一人のヒミコが不幸に耐え切れずに自殺するという悲劇の後で、残された4人が違いを乗り越えて癒しと融和を手にするのである。彼女たちはお茶を飲みながらヒミコについて語り合い、そこから自分たちの闘いを振り返り、連帯感を持つに至る。

“For the first time in our lives, we gather together all the pieces of our used-up hearts and come running here hoping we'll find some kind of miracle that will glue it all back together and send us into our old age with something to hold onto.” (195)

彼女たちは生まれて初めて相違点ではなく共通点を見出して、つながることができるのである。これは仲間の悲劇を経てようやく可能になったことであり、それまでの闘いを融和できる境地にたどり着いたわけである。ここではじめてタイトルのお茶“tea”がその象徴的な意味を明らかにする。お茶は多様性を認め合い連帯を促すものの象徴なのである。

この作品内容と前項の戦後マスコミが形成に寄与したステレオタイプを照合してみると、ここにはインサイダーが示す複雑な悩みがより詳細に示されている。*Tea*に描かれたステレオタイプが日本で形成されたステレオタイプと重なる部分は多い。先に挙げた三つの要素のステレオタイプいずれにも彼女たちは苦しむ。一つ目のステレオタイプとして、節子の結婚に父が反対し、その後自死することが日本における父権制とその崩壊を象徴し、その結果節子への非難が起きるといった点が挙げられる。そのような反対を押し切って戦争花嫁となった女性に対する非難中傷は、5人に共通するいわれのない二つ目のステレオタイプを伴う。さらに肝心の夫となったアメリカ人も、アジア女性のステレオタイプを抱いて自分たちを見下していることが明らかとなる。これがヒミコの向き合う現実で、大きな落胆をもたらす三つ目のステレオタイプである。こうした典型的ともいえるステレオタイプに加えてこの作品が描き出すのは、アメリカでの日系人からの非難中傷に関するステレオタイプだ。これは戦争花嫁にとっては予想外の事態であり、有色人種差別とともに彼女たちに大きな打撃を与える。このステレオタイプ自体は日本のステレオタイプと同じで新規なものではないが、日本をルーツとする同胞からさげすまれる事態は戦争花嫁たちをさらに孤立させ苦悩させたのである。

ヒューストンはこうした困難を戦争花嫁の母やその仲間から実際に見聞きし、インサイダーの立場からそれを言語化したのである。彼女の作品からは、その苦しみが複層的であったということがまざまざと読み取れる。こうしてヒューストンは戦争花嫁の困難を顧みることで、最終的に多様性と連帯というマイノリティにとって極めて重要なメッセージに到達している。そのメッセージは混迷を深める今のアメリカ社会に求められるものであるからこそ、この戯曲の再演が繰り返され、彼女自身もマスコミなどの取材に積極的に応じるのである<sup>20</sup>。

### 戦争花嫁のその後—ステレオタイプの消滅

江成常夫『花嫁のアメリカ』(1981)は戦争花嫁を正面から取り上げた初めてのフォトドキュメンタリーであり、出版時に大きな話題を呼んだ。それは戦争花嫁という存在を明らかにし、



彼女たちの困難を含めてこの国際結婚の20年あまりを公開したからにはほかならない。著者の江成は、戦争花嫁が米国全土に点在しているうえに彼女らをつなぐ組織は皆無だったため、取材は困難だったと述べている。彼は根気と意志力でその困難を乗り越え、結局総勢92人の戦争花嫁の米国における1980年頃の暮らしとその思いを写真と文に表した。そこには、日本とアメリカにおけるステレオタイプや米国における人種差別などのさまざまな困難が示されている。それと同時に、「戦争花嫁」という語への戦争花嫁自身の嫌悪感や拒否感も明らかにされた。この書の大きな目的は、彼女たちがどのように生きたかを明らかにすることであり、それがとりもなおさず故国や移民国における誤解や偏見に対する反論を示してもいる。江成はその後20年を経て、1997年から1年間かけて43人を再び取材し、それを『花嫁のアメリカ—歳月の風景』にまとめた。取材がかなわなかった女性の中には行方知らずになったり死亡したりしたものもいた。また夫が戦死するとか離婚するなど結婚生活が終わった者、さらにその後再婚したというケースもかなりある。多くの女性たちはたくましく生き延び、穏やかな老後を送るべく安逸を得ていた。ことに江成を印象付けたのは成長してアメリカ社会に根を下ろしている二世の子どもたちとその家族で、中には医師や教師、企業の部長や役員となっているものもいた。さらに三世の孫世代たちはアメリカ人として様々な夢を抱いて成長過程にあった。このように、取材対象の戦争花嫁の後日談はおおむね穏やかで幸せを感じさせるものである。それは悪戦苦闘しつつも最後にアメリカ社会の中で一定の地位を得た日系アメリカ人の歴史に重なって見える。

江成が後半の取材を始める少し前には、戦争花嫁の全米組織が形成されている<sup>21</sup>。発端は1988年の戦争花嫁渡米40周年記念大会で、300人あまりがワシントン州に集合した。それをきっかけに日系国際結婚親睦会が誕生し、会員数は500名を超えるまで大きくなった。会の設立の原動力は自分たちのステレオタイプに対する反発だったが、その目的は自らの存在を残すことにあった。1997年には日本の会津若松で世界大会を開催して、日本人に戦争花嫁の存在を示しお互いの親睦も深めていった。こうした経緯により、次第に戦争花嫁という語は肯定的な意味を持つように変化したといえる。結局、戦争花嫁と呼ばれた国際結婚の女性たちは人生の終着点の近くになって安定した生活を手に入れ、自らの足跡を残すことに意義を見出し、こうした交流や結束ができるようになったわけである。つながりを広げることは、その人生がより豊かになることにほかならない。

これはヒューストンが *Tea* に最終的に示したお茶の持つ力と同じ方向だと考えられる。*Tea* では5人の女性の相違が全面的に彼女たちを支配し、お互いのコミュニケーションを難しくしていた。彼女たちをつなぐお茶そのものはそれを象徴する。お茶に対する各人の好みは異なり、温度や味に対する好みの違いは彼女たちそれぞれの人生の相違を象徴する。しかしヒミコという仲間の悲惨な死を通して残りの4人を連帯へと導くのは、一緒に飲むお茶の力なのである。お茶は「彼女らの過去と現在を結ぶ存在」<sup>22</sup>として真の意味での人生の安定した終着地点だと示される。もはやステレオタイプに悩まされた嵐の時代は過ぎたという見方が可能となるこの最終シーンこそ、上記した実際の姿と重なるのである。

## 結語—戦争とジェンダー抑圧

ここまで戦争花嫁に関するマスコミ報道や文学に表わされたネガティブなステレオタイプ  
の働きを明らかにし、分析してきた。このステレオタイプは、戦後に敵国だったアメリカ兵

士と結婚した女性に対する偏見や誤解、そして妬みなどがないまぜになって生じたもので、その虚像は独り歩きし多くの女性を苦しめた。冒頭に述べたように、このステレオタイプの根源には戦前日本の軍事化された社会構造の崩壊がある。これはジェンダー秩序の崩壊をも意味し、日本の家族制を揺るがせ男性主体の社会構造を否定するものとして、社会への脅威と捉えられた。戦争花嫁は、その脅威の象徴として非難の対象となったわけである。そして彼女らに対するネガティブなステレオタイプは、こうした社会変動に対する複雑な感情の中から捏造されたのである。ここにみられるのは、ある少数の人間を糾弾することで多数派の人間の矜持を維持できるという他者化の心理である。トニ・モリスンは、他者化とは自分たちに属さぬものを選別し、その相手を弱者化する行為であり、その目的は自己の優勢を維持することにあるとしている<sup>23</sup>。戦後の日本における戦争花嫁のステレオタイプ捏造の過程は、まさにこの他者化にほかならない。この他者化は、戦争花嫁という普通でない女性、家父長制の保護に甘んじない女性を糾弾の対象としており、ジェンダーの抑圧なのである。これは、家制度に従わずに個人として主張し選択し行動した少数派の戦争花嫁を他者化するために、日本社会がステレオタイプを生み循環させ、結果として対象のジェンダーを抑圧したという構図である。戦争がなければ、あるいは敗戦がなければ、この状況は生じなかったと考えると、冒頭に述べたようにこれは戦争関連のジェンダー問題なのである。戦争はこのような間接的ともいえる形でジェンダー抑圧をもたらすこともある。日本でもアメリカでもジェンダーの抑圧がきわめて重要な問題として脚光をあびている現在、戦争花嫁のステレオタイプの分析を通してこの事象をジェンダー抑圧と位置づけて、戦争花嫁の再評価とする次第である。

※ 本研究は JSPS 科研費（基盤研究（C）16K02513）の助成を受けたものである。

---

<sup>1</sup>エンロー（2004）43-74.

<sup>2</sup>米国では70年代に日本人戦争花嫁に関する研究がみられたが、日本では2000年を越えてから研究が盛んになっている。

<sup>3</sup> Sue & Kitano（1982）参照。

<sup>4</sup>クロード・スティーラー（2020）参照。

<sup>5</sup> BS1 スペシャル「戦争花嫁たちのアメリカ」（前編、後編）はNHK オンデマンドで視聴。

<sup>6</sup> 本論後半で扱うアメリカ人作家のヴェリナ・ハス・ヒューストン（Velina Hasu Houston）と母節子はこの両方に登場しインタビューに応じている。

<sup>7</sup> Kawarasaki（1994）参照。この論文は筆者の修士論文である。公式には出版されていないが、UCLA の Asian American Studies の Library で閲覧可能であり、最も初期の日本人による戦争花嫁に関する研究として1994年以降度々引用もされている。戦争花嫁関連の書籍や研究は以降2000年前後から安富成良や林かおりなどによって出版されているが、年代が示すようにこれが先行研究である。なお本論はここで示したステレオタイプ分析を中心に上げしたが、巻末の付録は調査対象の概要を示した。全記録は膨大なためここには収録できず、詳細は英文論文を参照されたい。

<sup>8</sup>戦争花嫁の統計数は年代をどのように取るかにもよるが、1949年から64年の間に約45,853人が移民したとシンプソンは述べている。しかし6万から11万5千という数字も出ていて、今なお統計では正確な数は把握できていない。

<sup>9</sup> Kawarasaki (1994) および巻末の付録を参照。

<sup>10</sup> V. ヒューストン自身がこれを指摘している (島田、2009 参照)。

<sup>11</sup> Williams (1991) 参照。なお Williams は戦争花嫁の子どもである。

<sup>12</sup> 広辞苑第6版より

<sup>13</sup> GI は Government Issue の略。転じてアメリカで徴募兵または一般に兵士の俗称。(広辞苑第6版)

<sup>14</sup> これに関しては江成 (1981, 2000) および河原崎 (1994) 参照。

<sup>15</sup> これについては様々な研究論文が出されているが、本田 (2017) などを参照。

<sup>16</sup> ヴェリナ・ハス・ヒューストン「民間親善大使—アメリカの日本人戦争花嫁」島田法子編著 (2009) 参照。

<sup>17</sup> Houston (1993), “Introduction” 参照。

<sup>18</sup> Houston, *Asa Ga Kimashita* (236) 以下の引用文はページ数を示す。

<sup>19</sup> Houston, *Tea* (168)。

<sup>20</sup> ヒューストンのインタビューは新聞や雑誌に多く掲載されているが、筆者自身も2003年にロサンゼルスで長時間インタビューをし、そのほか2、3度非公式インタビューも行った。

<sup>21</sup> この項に関しては林かおりほか『戦争花嫁』(2002)、島田法子編『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道』(2009) 参照。

<sup>22</sup> 古木圭子 (2021) 参照。

<sup>23</sup> トニ・モリスン『「他者」の起源』参照。

## 引用文献

江成常夫 『花嫁のアメリカ』講談社、1981年。

\_\_\_\_\_ 『花嫁のアメリカ 歳月の風景』集英社、2000年。

エンロー、シンシア 『フェミニズムで探る軍事化と国際政治』秋林こずえ訳、お茶の水書房、2004年。

河原崎やす子 「たたかう女たち—Velina H. Houston の Tea が描く戦争花嫁の軌跡」アジア系アメリカ文学研究会、*ALA Journal*, No. 2, 1995. (47-55)

\_\_\_\_\_ 「ジェンダーからみる太平洋戦争の記憶—環太平洋文学の描く日本植民統治」岐阜聖徳学園大学外国語学部編 『アカデミック・ダイバーシティの創造』彩流社、2022年刊行予定。

島田法子編著 『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道』明石書店、2009年。

スティール、クロード 『ステレオタイプの科学』英治出版、2020年。

日本放送協会「戦争花嫁たちのアメリカ」(前編、後編) BS1 スペシャル (2020年1月29日放映)

林かおりほか 『戦争花嫁—国境を越えた女たちの半世紀』芙蓉書房、2002年。

ヒューストン、ヴェリナ・ハス「民間親善大使—アメリカの日本人戦争花嫁」島田法子編著 『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道』明石書店、2009年。

- 古木圭子「ヴェリナ・ハス・ヒューストンの戯曲に見る多文化多人種の象徴としての「茶」の役割」山本秀行編集代表『アジア系トランスボーダー文学—アジア系アメリカ文学研究の新地平』小鳥遊書房、2021年。
- 本田真隆「「家」の越境と断絶」『三田社会学 No.22』三田社会学会、2017年。
- トニ・モリスン『「他者」の起源』集英社、2019年。
- Houston, Velina H. "Tea." *Unbroken Thread*. Roberta Uno, ed. U. of Massachusetts P., 1993. (161–200)
- \_\_\_\_\_, ed. *The Politics of Life: Four Plays by Asian American Women*. Temple U. P., 1993.
- Kawarasaki, Yasuko. "Negative Stereotypes of Japanese War Brides: An Outburst of Japanese Frustration." Unpublished MA Thesis, UCLA, 1994.
- Sue, Stanley, and Morishima, James K. *The Mental Health of Asian Americans*. Jossey-Bass Publishers, 1982.
- Thornton, Michael C. "A Social History of a Multiethnic Identity: The Case of Black Japanese Americans." Ph.D. Dissertation, University of Michigan, 1984.
- Tolbert, Kathryn. "Untold Stories of Japanese War Brides." *Washington Post*, 22 September 2016. (<https://www.washingtonpost.com/sf/national/2016/09/22/from-hiroko-to-susie-the-untold-stories-of-japanese-war-brides/>)
- Williams, Teresa K. "Marriage between Japanese Women and U. S. Servicemen since World War II" *Amerasia Journal*, UCLA Asian American Studies, 17 : 1991.

## 付録 調査対象メディア一覧（対象は1945～1981の全記事）

| 新聞   | 雑誌          | 週刊誌     |
|------|-------------|---------|
| 朝日   | 婦人公論        | サンデー毎日  |
| 毎日   | 婦人之友        | 週刊朝日    |
| 読売   | 主婦の友        | 朝日グラフ   |
| 東京   | 生活          | 週刊新潮    |
| 産経   | 家庭画報        | 週刊文春    |
| 日本経済 | 婦人画報        | 週刊読売    |
|      | 女性改造        | 朝日ジャーナル |
|      | 真相          | 週刊明星    |
|      | 婦人朝日        | 週刊産経    |
|      | 中央公論        | 週刊東京    |
|      | 文芸春秋        | 週刊女性    |
|      | 丸           | 女性自身    |
|      | 文化生活        | 週刊平凡    |
|      | リーダーズダイジェスト |         |
|      | オール読物       |         |
|      | 新潮          |         |
|      | 改造          |         |
|      | 朝日評論        |         |
|      | 民衆の友        |         |
|      | 婦人新聞        |         |
|      | 婦人倶楽部       |         |
|      | 婦人雑誌        |         |
|      | 婦人新聞        |         |
|      | 婦人生活        |         |
|      | 婦人世界        |         |